

提出締切：2026 年 1 月 27 日 午前 9:00

今回の演習問題では、実対称行列について、以下に述べる性質を用いてもよい。

性質 1 実対称行列の固有値はどれも実数である。

性質 2 d 次実対称行列の固有ベクトルを使って、 \mathbb{R}^d の正規直交基底を構成できる。つまり、 d 次実対称行列 A の固有値が $\lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \dots \geq \lambda_d$ であるとき、 v_i を λ_i に対応する固有ベクトルとして、 $\{v_1, v_2, \dots, v_d\}$ が \mathbb{R}^d の正規直交基底となるようにできる。

授業内問題 11.1

実行列 $A \in \mathbb{R}^{m \times n}$ に対して、次の正方行列

$$Y = \begin{bmatrix} O & A \\ A^T & O \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^{(m+n) \times (m+n)}$$

を考える。

1. Y が対称行列であることを証明せよ。
2. ベクトル $v \in \mathbb{R}^n, u \in \mathbb{R}^m$ と実数 λ が次を満たすとする。

$$\begin{aligned} Av &= \lambda u, \\ A^T u &= \lambda v. \end{aligned}$$

このとき、 λ は Y の固有値であり、ベクトル

$$\begin{bmatrix} u \\ v \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^{m+n}$$

が λ に対応する Y の固有ベクトルであることを証明せよ。

3. λ が Y の固有値であるとき、 $-\lambda$ も Y の固有値であることを証明せよ。
4. 行列 $X = A^T A$ の固有値・固有ベクトルを Y の固有値・固有ベクトルから得る方法を記述せよ。(ヒント： X は対称半正定値行列なので、その固有値は必ず非負実数である。)

復習問題 11.2 \mathbb{R}^d における直線 ℓ が原点 $0 \in \mathbb{R}^d$ を通るものとする。そのような直線 ℓ の単位方向ベクトルが $u \in \mathbb{R}^d$ であるとする、 ℓ は

$$\ell = \{\alpha u \mid \alpha \in \mathbb{R}\}$$

と表すことができる。

点 $x \in \mathbb{R}^d$ を ℓ へ直交射影で写して得られる点を x' とするとき、 x' を x, u を用いて表してみよ。

復習問題 11.3 実対称半正定値行列 $A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ の最大固有値が λ_1 で、 λ_1 に対応する単位固有ベクトルを v_1 とするとき、

$$\max_{\substack{u \in \mathbb{R}^d \\ \|u\|=1}} u^T A u = v_1^T A v_1 = \lambda_1$$

が成り立つことを証明せよ。(ヒント：「 $=$ 」を証明するために、「 \geq 」と「 \leq 」を証明せよ。)

復習問題 (発展) 11.4 実対称半正定値行列 $A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ の最大固有値・第 2 最大固有値が λ_1, λ_2 で、 λ_1, λ_2 に対応する単位固有ベクトルを v_1, v_2 とするとき (ただし、 $v_1^T v_2 = 0$)、

$$\max_{\substack{u_1, u_2 \in \mathbb{R}^d \\ \|u_1\|=\|u_2\|=1 \\ u_1^T u_2=0}} u_1^T A u_1 + u_2^T A u_2 = v_1^T A v_1 + v_2^T A v_2 = \lambda_1 + \lambda_2$$

が成り立つことを以下のステップに沿って証明せよ。

1. $v_1^T A v_1 + v_2^T A v_2 = \lambda_1 + \lambda_2$ を証明せよ。
2. 次の不等式を証明せよ。

$$\max_{\substack{u_1, u_2 \in \mathbb{R}^d \\ \|u_1\|=\|u_2\|=1 \\ u_1^T u_2=0}} u_1^T A u_1 + u_2^T A u_2 \geq v_1^T A v_1 + v_2^T A v_2.$$

3. 逆向きの不等式を証明するために、 $\|u_1\| = \|u_2\| = 1$ と $u_1^T u_2 = 0$ を満たすベクトル $u_1, u_2 \in \mathbb{R}^d$ に対して

$$U = \begin{bmatrix} u_1 & u_2 \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^{d \times 2}$$

と定義する。このとき、 $U^T U = E_2$ (つまり、2 次単位行列) であることを証明せよ。

4. 前小問の U を用いて、

$$\text{tr}(U^T A U) = u_1^T A u_1 + u_2^T A u_2$$

が成り立つことを証明せよ。

5. 行列 A はある直交行列 $V \in \mathbb{R}^{d \times d}$ とある対角行列 $D \in \mathbb{R}^{d \times d}$ を用いて、 $A = V D V^T$ と対角化できる。ここで、 D の第 i, i 成分は A の第 i 最大固有値 λ_i であるとする (そのようにできる)。行列 $Z \in \mathbb{R}^{d \times 2}$ を $Z = V^T U$ で定義するとき、

$$\text{tr}(U^T A U) = \sum_{i=1}^d \lambda_i (z_{i1}^2 + z_{i2}^2)$$

が成り立つことを証明せよ。

6. $\sum_{i=1}^d (z_{i1}^2 + z_{i2}^2) = 2$ が成り立つことを証明せよ. (ヒント: まず, $Z^T Z = E_2$ を証明して, $\text{tr}(Z^T Z)$ を考えてみよ.)
7. 各 $i \in \{1, 2, \dots, d\}$ に対して,

$$0 \leq z_{i1}^2 + z_{i2}^2 \leq 1$$

が成り立つことを次の方針に従って証明せよ.

- (a) $z_{i1}^2 + z_{i2}^2$ が ZZ^T の第 i, i 成分であることを証明せよ.
- (b) $P = UU^T$ とする. P が次の性質を満たすことを証明せよ.
- $$P^T = P, \quad P^2 = P.$$
- (c) P の固有値が 0 か 1 であることを証明せよ.
- (d) ZZ^T の固有値が 0 か 1 であることを証明せよ. (ヒント: P の固有多項式と ZZ^T の固有多項式が一致することを証明せよ.)
- (e) 任意の単位ベクトル $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^d$ に対して,

$$0 \leq \mathbf{x}^T (ZZ^T) \mathbf{x} \leq 1$$

が成り立つことを証明せよ. (ヒント: 演習問題 11.5 の結果を用いてもよい.)

- (f) 以上の結論として, $0 \leq z_{i1}^2 + z_{i2}^2 \leq 1$ を導出せよ.

8. いままでの議論をまとめて, 不等式

$$\max_{\substack{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2 \in \mathbb{R}^d \\ \|\mathbf{u}_1\| = \|\mathbf{u}_2\| = 1 \\ \mathbf{u}_1^T \mathbf{u}_2 = 0}} \mathbf{u}_1^T A \mathbf{u}_1 + \mathbf{u}_2^T A \mathbf{u}_2 \leq \lambda_1 + \lambda_2$$

が成り立つことを証明せよ.

補足問題 11.5 実対称行列 $A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ の最大固有値を λ_1 , 最小固有値を λ_d とするとき,

$$\lambda_1 = \max_{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^d - \{\mathbf{0}\}} \frac{\mathbf{x}^T A \mathbf{x}}{\mathbf{x}^T \mathbf{x}},$$

$$\lambda_d = \min_{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^d - \{\mathbf{0}\}} \frac{\mathbf{x}^T A \mathbf{x}}{\mathbf{x}^T \mathbf{x}}$$

が成り立つことを証明せよ.

補足問題 11.6 実対称行列 $A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ の第 2 最大固有値を λ_2 とするとき,

$$\lambda_2 = \max_{\substack{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^d - \{\mathbf{0}\} \\ \mathbf{v}_1^T \mathbf{x} = 0}} \frac{\mathbf{x}^T A \mathbf{x}}{\mathbf{x}^T \mathbf{x}}$$

が成り立つことを証明せよ. ただし, \mathbf{v}_1 は最大固有値に対応する A の固有ベクトルである. (ヒント: $\{\mathbf{v}_1\}$ の直交補空間の基底として, $\{\mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_d\}$ が取れることを利用せよ.)

追加問題 11.7 \mathbb{R}^d における直線 ℓ が点 $\mathbf{p} \in \mathbb{R}^d$ を通るものとする. そのような直線 ℓ の単位方向ベクトルが $\mathbf{u} \in \mathbb{R}^d$ であるとする, ℓ は

$$\ell = \{t\mathbf{u} + \mathbf{p} \mid t \in \mathbb{R}\}$$

と表すことができる.

- 点 $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^d$ を ℓ へ直交射影で写して得られる点を \mathbf{x}' とする. \mathbf{x}' を $\mathbf{x}, \mathbf{u}, \mathbf{p}$ を用いて表してみよ.
- n 個の点 $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_n$ のそれぞれと ℓ の距離の 2 乗の和を最小化するような ℓ を定めたい. $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_n$ が

$$\sum_{i=1}^n \mathbf{x}_i = \mathbf{0}$$

を満たすとき, ℓ が原点 $\mathbf{0} \in \mathbb{R}^d$ を通ることを証明せよ.